

平成 26 年 5 月 23 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520182

研究課題名(和文)近世堂上派歌人の宗匠選択についての研究

研究課題名(英文)Research on selection of waka poets master in the middle of the Edo period

研究代表者

久保田 啓一 (KUBOTA, KEIICHI)

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号：80186452

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：近世中期の堂上派武家歌壇では、幕臣や諸大名が京の公家に和歌の指導を仰ぐことが本格化した。彼らは社会的・経済的にむしろ公家を凌ぎ、公家たちの指導振りを俎上に載せて評価し、彼らを競わせた上で、懇切丁寧な指導を行う方を選ぶ姿勢を見せるようになった。江戸の地で多くの門人を持った冷泉家と日野家の競争はその典型的な事例である。本研究では、享保から宝暦に至る幕臣文化圏の実態、及び天明期以降の松平定信を信奉する層の意識・動向を資料に即して分析し、和歌和文を愛好する武士たちの表現意識が堂上公家を敬いつつも江戸の地に即した詠作の意義を自得するに至る様子を考察した。

研究成果の概要(英文)：In the middle of the Edo period, many retainers of the Edo shogunate and feudal lords learned how to write waka poets from court nobles. The pupils were superior to their masters in status and economic power, so they let masters compete in the way of teaching, for example the Reizeis and the Hinos.

In this research, I considered the actual situation of the world of waka poets of the Edo shogunate in the eighteenth century, and the expression of retainers in waka poets. They flattered themselves that they were under the direct control of the Edo shogunate with the respect for masters.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：幕臣文化圏 冷泉家 日野家 和歌 宗匠

1. 研究開始当初の背景

冷泉家を中心に近世中期の和歌を考究する過程で、主要な門人層である各地の大名と宗匠家との関係にいくつかの類型があることに気づかされた。すなわち、特定の堂上公家にひたすら師事する者、同時に二つ以上の公家から指導を受け、その指導法を比較する者、そして公家からは指導を受けず、ごく少数の地下歌人の指導を受ける者などである。この意味するところを解明したいと思い、本研究を開始した。

2. 研究の目的

和歌を詠ずる活動が、上は天皇・院、下は農民・町人に至るまで、あらゆる階層に拡大した近世は、またさまざまな師弟関係の類型を豊富に見ることの出来る時代であった。概して、強い指導力を有する宗匠が門人層の上に君臨したといった図式で説明されることが多いが、実は門人の要望に沿う形で宗匠達がサービスを競い、門人達は提供される具体的な指導を見比べて宗匠を選ぶ場合が少なからずあった。師弟関係を固定的に捉えるのではなく、それぞれの実態に即した分析を行って、近世の身分階層の上から下へと伝播した和歌の享受のされ方を明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、次のような階梯を踏んで展開された。

(1) 冷泉家の歴代当主とその門弟からなる歌壇の資料研究。

平成21年度まで補助金を受けた「近世冷泉派歌壇の伝存資料についての研究」を継続するべく、申請者の主たる研究対象である冷泉家の歴代とその門流からなる冷泉派歌壇の資料研究を継続して実施した。紙焼きやコピーなどによる収集、各項目の時間軸に沿った配列、和歌・和文の作者名の検索システムの構築などの作業に従事した。国文学研究資料館、宮内庁書陵部、国立公文書館内閣文庫、国立国会図書館などで調査収集を行ったが、近世冷泉派の規模が巨大であるため、資料群の全貌はなかなか見えてこない。

(2) 日野資枝を中心とする近世中後期の日野家歴代とその門弟からなる歌壇の資料研究。

冷泉家に関する資料研究と並行して、日野資枝を中心とした近世中後期の日野家に関する資料調査を開始した。資枝は冷泉為村の江戸冷泉門経営の卓越した手腕に瞠目し、家の繁栄に直結する和歌指導の威力を目の当たりにしたという逸話を有する。また、折しも幕政改革に乗り出した老中松平定信が日野門人だったこと、配下の幕臣が次々に冷泉門から日野門へ移ったことが知られている。それゆえに、資枝の活動を総括することは、

本研究の課題に直結するのである。

日野家の資料の多くが伝存する宮内庁書陵部を始め、大部な資枝の家集「先考御詠」を蔵する国会図書館などを重点的に調査し、資料の収集に努めた。資枝は存在の大きさのわりに注目度が低く、資枝個人の研究はいまだになされていない。また、日野家に関する資料整備も著しく遅れている現状を踏まえ、資枝関連資料の収集に力点を置いて進めた。具体的には資枝の年譜として各事項を時間軸に沿って配列し、冷泉家の事績と比較対照できるような形で整理していった。ただし、現時点では整理の段階に留まり、日野家の和歌活動の特徴を、冷泉家との対比の中で明らかにするには至っていない。

(3) 冷泉・日野両家の指導の実際に迫る添削資料や歌学書、書簡群の解読と分析。

(1)(2)の調査収集によって得られた資料を基に、冷泉家と日野家、具体的には冷泉為泰と日野資枝との比較を通して、近世中期から後期にかけての堂上公家の門人獲得とその維持方法を検証し、門人達がどのような指導を宗匠家に期待し、宗匠家がどのように応えたかを具体的に探った。その際には、歌集などの2次資料ではなく、歌会記録、添削指導の反映された詠草類、宗匠家が門人たちに出した書簡などを重点的集中的に調査する必要がある。大和郡山藩柳沢家、出羽庄内藩酒井家の当主は、冷泉家と日野家の双方に師事していたので、本研究の中核をなす資料が豊富に得られた。

また、陸奥八戸藩南部家の当主智信は、江戸藩邸を拠点として堂上諸家の歌学を積極的に吸収したが、その手足となって働いたのは近藤利亮という人物で、近隣の五島藩邸にも出入りしていたことが確認された。このことは、大名と宗匠家を結びつけるのに、利亮のような自由な境涯の人物の存在が有益であった状況を自ずと示す。大名が宗匠を選ぶ際に、利亮のような存在が重宝された時期が確かにあったわけで、彼らの動きも宗匠選択の要素として留意する必要がある。

(4) 近世中期江戸武家歌壇のなかで冷泉派の中心的位置を占めた成島信遍、次々に指導を受ける宗匠を替えた萩原宗固、冷泉派優位の中で日野門に入った松平定信、寛政期の江戸雅俗文壇の主だった人を集めて和文の会を開いた大田南畝など、宗匠選択において特色を持った歌人の個別研究。

成島信遍に関しては、彼の生涯にわたる事蹟を年譜形式で逐次発表しており、本研究でもその作業を継続した。信遍の活動が、同時代の江戸幕府の文事そのものといってよい状況が、少なくとも将軍吉宗在任中には現出していたといえるので、この作業は重要な位置を占める。

幕臣歌壇が冷泉門から日野門へと大きく方向転換する安永・天明期から寛政・享和期

にかけての状況が松平定信の老中就任と連動するのはいうまでもない。定信の意向が測り知れないほど幕臣たちに影響を与えたであろうことは容易に想像されるが、その実態はなかなか資料に表われない。宮部義正、内藤正範ら、宗匠家を替えた幕臣の意識を窺うに足る1次資料の伝存は少なく、定信が日野門であることを標榜した資枝の発言に依拠するしかない。萩原宗固については静嘉堂文庫その他に豊富な資料が蔵されるので、詠草や歌学書の情報を可能な限り集成した。国立公文書館内閣文庫蔵の森山孝盛の日記「自家年譜」は大田南畝と同時代の文人旗本の動静を伺うに足る好資料である。必ずしも多くはないが文学に関わる事項を抜き出して検討の対象とした。

大田南畝については、寛政11年成立の和文集「ひともと草」の詳注が、同時代の表現意識を汲み上げるのに役立った。

本研究に先立つ「近世冷泉派歌壇の伝存資料についての研究」の遂行に際して痛感したことであるが、近世堂上派歌壇の資料は、数年に限られた調査ではいかんともしがたいほどに龐大であり、本研究で完結することはほとんど不可能に近いことが予想された。結それだけに、今後の近世和歌研究に対する重要な指針を与えることがまずは優先されるべきであり、将来の継続に期するところが大きい。

4. 研究成果

指導にあたる宗匠家として、冷泉家と日野家を選び、その中心となる冷泉為村・為泰及び日野資枝の資料収集に努めた。ただし、いずれにしても龐大な量の伝存が確認され、収集の段階に留まっており、内容の分析を十分に行うには至っていない。特に日野門人の組織の実態がほとんど明らかになっていない現状では、門人側に残る1次資料の発掘が思うように進まないという限界があった。

次に、門人となる大名側の検討は、大和郡山藩柳沢家、出羽庄内藩酒井家、陸奥八戸藩南部家などを中心に扱った。柳沢家には資枝による伝書が豊富に伝わるが、その中には資枝が柳沢家当主に対して、他の宗匠家より日野家が優位に立つ旨を語る一節があり、資枝が門人層拡大を明瞭に意図して大名に対していたことを裏付ける資料となった。ただし、この記事のみを取り立てて論じるのでは不十分であり、購入した「公家書簡集」や柳沢家の来簡集などと突き合わせての検討が要請される場所である。今後、機会を得て本文の検討と集成を図っていきたい。

酒井家の当主忠徳が冷泉為泰・日野資枝に指導を受けつつ両者を競わせていたことについては、既に忠徳の詠草で確認済みである。鶴岡の致道博物館に蔵される資料の活用を今後の課題としていきたい。

南部家については、近世中期の南部智信の

時代にもっとも和歌・歌学が盛んとなり、江戸の藩邸で近藤利亮が歌書の収集に努めていたことが確認された。しかも、利亮は近隣の五島藩邸にも自由に出入りしていたようであり、どこの藩にも縛られない自由な身の上なればこそ歌壇形成に大きく関与できたと推測される。

幕臣歌人としては、萩原宗固や森山孝盛の資料研究に従事した他、成島信遍の伝記研究を継続して実施した。宗固の場合はまだ資料研究の途上にあり、孝盛については日記「自家年譜」から文芸関係記事を抽出したに留まり、まとまった形で論考を発表するに至っていないが、信遍の年譜は吉宗側近として携わった文事が最高潮を迎える元文年間に到達した。この作業を継続していくことで、信遍の死後の江戸武家歌壇の状況がより適確に捉えられるのはいうまでもなく、大田南畝たちの世代が信遍たちを仰ぎ見る根拠を知り得ると思われる。

松平定信の影響が強かった寛政期の江戸和文壇の表現意識を伺う大田南畝編「ひともと草」の詳注は、この時期の文学状況の考査に大きな拠り所を提供しつつある。南畝を始めとする下級御家人の集団に、南畝を取り巻く町人戯作者、定信との関係もある碩学屋代弘賢他の好学の旗本など、「ひともと草」は雅俗にわたる江戸文壇の最良の見取り図を提示してくれる。南畝たちの関心と学力にふさわしい典拠を踏まえつつの注釈は、彼らの文芸意識を汲み上げるのに最もふさわしい対象であるといえよう。

肝心の松平定信に関して十分な調査研究が出来なかったのは残念であるが、天理図書館の松平定信著述の総合的な検討が今後の課題として残される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

1. 久保田啓一,成島信遍年譜稿(十四),広島大学大学院文学研究科論集,査読無,73巻,2013,pp1-11
2. 久保田啓一,大田南畝編『ひともと草』試注(十一)-藤原覃「六阿弥陀詣」(上)-,鯉城往来,査読無,16号,2013,pp78-89
3. 久保田啓一,成島信遍年譜稿(十三),広島大学大学院文学研究科論集,査読無,72巻,2012,pp39-55
4. 久保田啓一,大田南畝編『ひともと草』試注(十)-吾友軒「はつ午」-,鯉城往来,査読無,15号,2012,pp131-146
5. 久保田啓一,大田南畝編『ひともと草』試注(九)-馬蘭亭〔根岸鶯〕-,鯉城往来,査読無,14号,2011,pp33-51
6. 久保田啓一,成島信遍年譜稿(十二),広島大学大学院文学研究科論集,査読無,70巻,2010,pp1-13

7. 久保田啓一,大田南畝編『ひともと草』試注(八) - 馬蘭亭「牛天神梅」 - ,鯉城往来, 査読無,13号,2010,pp68-88

6 . 研究組織

(1)研究代表者

久保田 啓一 (KUBOTA KEIICHI)

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：8 0 1 8 6 4 5 2